

## 〈研究ノート〉

# オンライン教育の質保証に関する取り組みについて

## —カリフォルニア州立大学の事例—

佐野 ひとみ

### Abstract

2020年度前期、新型コロナウイルスへの感染予防のため日本国内にある9割以上の大学で対面形式の授業がオンライン形式に切り替わった。後期には感染対策を徹底しながら対面授業の再開が求められ、オンライン形式と対面形式を併用した授業が行われた。オンライン授業が定着したことを契機に、教育改善につなげたいという肯定的な意見も出たことから、コロナ禍により新たに登場した授業形態に注目が集まり、研究が進められている。しかし、オンライン形式の授業について、どのような観点から質を評価すべきなのか、教育の質に関しては十分な研究がされていない。そこで、本論文では、オンライン教育の質保証に関する取り組みが進んでいるアメリカ合衆国の事例を調査した。

**キーワード (Key Words) :** オンライン学習、クオリティ・マターズ (Quality Matters)、レビュープロセス、ルーブリック

### 1. 序論

2020年、コロナ禍により日本国内にある9割以上の大学で対面形式の授業がオンライン形式に切り替わった。IDE大学協会が発行する『IDE現代の高等教育』(2020年10月号)では「コロナ禍の中の大学」についての特集が組まれた。日本国内で新型コロナウイルス感染の拡大が始まった2020年2月、私立大学連盟の事務局には加盟校からの問い合わせが寄せられ、事務局は学内体制、授業開始、留学生対応などの18項目の対応状況を情報共有ページに集約し、3月には加盟校に情報の共有をした(坂下 2020)。特集では各大学でのオンライン授業への切り替えについても言及されていた。例えば、津田塾大学では3月中旬にオンライン授業についての検討が開始し、オンライン授業プロジェクトチームが立ち上がり、5つのワーキンググループ(コミュニケーション、ファカルティ・デベロプメント、システム整備、学生・教員の環境整備、サポート)が置かれた(高橋 2020)。また、早稲田大学では新学期の授業を5月11日に開始することを3月24日に決定し、オンライン授業の準備は4月1日から開始した(田中 2020)。オンライン授業の導入は新型コロナウイルスの感染拡大防止のための手段として実施された。朝日新聞社と河合塾による調査「ひらく日本の大学」では、2020年度前期に実施されたオンライン授業に関して「実験・実習・実技系科目への対応」や「学生の学修意欲・メンタルケア等」などの課題が指摘された。一方で、オンライン授業が定着したことを契機に、教育改善につなげたいという肯定的な意見も出ていた。

2020年8月の文部科学大臣の会見において、新型コロナウイルスへの感染予防を徹底しながら「対面授業を再開する」という文脈で、大学に「オンラインと対面のハイブリッドな授業」を求めたことから、2020年度後期にはオンライン形式と対面形式を併用した授業が

行われた。このような状況を受け、オンライン形式と対面形式を組み合わせる授業の運用と実施について注目が集まり、研究が進められた。コロナ禍により新たに登場した授業形態についての課題と対策を検討した先行研究として、単位制度の観点から検討した研究（澁川 2020）と授業の実施について検討した研究（田口 2020）がある。単位制度については、これまでの制度を引き続き運用する中で新たな授業形態の登場により、(1) 遠隔授業と面接授業の区別、(2) 遠隔授業の単位認定の要件、(3) 授業時間と授業外学習時間から成る1単位の定義について検討が必要であることが指摘された。授業の実施については、対面授業については、対面でなければ実現できない授業内容が要求されていくことや、オンライン授業の実施形態（リアルタイム型、オンデマンド型）の選択など、授業形態に関わらず、授業自体の質の向上が課題として上げられていた。

どのようにオンライン授業を効果的に取り入れるか、反対に対面授業をどのように位置付けるか、授業の設計を個別の授業ごとに考えることが必要である。しかし、具体的にどのように授業の質を向上させられるか、どのような観点から質を評価するべきなのか、オンライン教育の質に関しては十分な研究がされていない。そこで、本論文では、オンライン教育の質保証に関する取り組みが進んでいるアメリカ合衆国の事例を調査した。様々な取り組みの中でも、クオリティ・マターズとカリフォルニア州立大学（CSU: California State University）のオンライン教育の質保証システムについて検討した。クオリティ・マターズに着目した理由は、アメリカ合衆国以外の国からの加入者も多く、グローバルに展開されているオンライン教育の質保証プログラムであるためである。一方、CSUの質保証プログラムを調査した理由は、授業設計のルーブリックを公開しており、プログラムを修了した教員による授業評価の結果やプログラムの効果検証をした研究成果も公表されているため、日本国内の高等教育機関の授業にも資する情報が豊富にあると考えたためである。将来的にテクノロジーの発展により次々と登場する新たな教育の方法・授業の形態について、高等教育機関としてどのように教育の質を保証できるか検討し、日本国内の高等教育機関におけるオンライン教育に応用できる知見と、現状で考えられる課題を上げた。

## 2. 本論

### 2.1. アメリカ合衆国の高等教育機関におけるオンライン教育の進化

アメリカ合衆国の学者 Anthony G. Picciano 氏は 2017 年に出版した書籍“Online Education Policy and Practice”の中で、インターネットを始めとするテクノロジーの発展とオンライン教育の進化を関連付けている。まず、1993 年から 1999 年の間に、インターネットのテクノロジーが急速に普及したことにより、インターネットを活用したオンライン教育の導入が始まった。しかし、1990 年代当時のインターネットはダイヤルアップによる接続が必要で、通信のスピードが非常に遅く、文字情報（text-based）を中心としたオンライン教育だった。

2000 年代初頭、インターネット回線のスピードが上がり、高速での通信が一般の家庭にも普及したことで、文字情報に加えてイラストや音声、動画を教材として提供することが可能になった。また、ブログやウィキ、YouTube、ソーシャルメディアのサービスが次々と登場したことで、様々なメディアを活用することができるようになった。1990 年代は通信教育を提供する大学を中心に導入されたオンライン教育が、多くの大学に取り入れられてい

った。2003年には、アメリカ合衆国内の80%の大学が Learning Management System (LMS) を導入済みだったという報告もあった。

## 2.2. クオリティ・マターズについて

クオリティ・マターズ (QM: Quality Matters) は、オンライン教育の質保証を専門とする非営利団体であり、アメリカ中等後教育改善基金 (FIPSE: Fund for the Improvement of Postsecondary Education) からの助成金を受けて MarylandOnline によって 2003 年に設立された。2021 年現在、アメリカ合衆国を始めとして 30 カ国以上の国にある 1500 以上の教育機関が QM のプログラムに加入している。加入者の情報は QM の公式ウェブサイト上で公開されており、日本国内の加入機関としては 1 機関 (大阪大学) が掲載されている。QM のプログラムは、教育機関としての加入だけではなく、個人としての加入も有償で受け入れている。また、QM のプログラムについて学ぶための入門プログラム (“Elements of Quality Matters”) は MOOCs (Massive Open Online Courses) のコースの一つとして Canvas Network から提供されており、誰でも無料で受講することが可能となっている。

QM では、オンライン教育の質を決定する要因として 7 つの要素を上げている。

- ① コース設計 (course design)
- ② コースの配信方法 (course delivery)
- ③ コースの内容 (course content)
- ④ 教育機関のインフラ (institutional infrastructure)
- ⑤ LMS (learning management system)
- ⑥ 教員のレディネス (faculty readiness)
- ⑦ 学生のレディネス (student readiness)

QM のプログラムでは主にコース設計に焦点を当てている。しかし、加入者は次に説明する 5 つのステージを経て、所属する教育機関での実践を継続することにより、コース設計以外のあらゆる側面への応用も考慮されたプログラムになっている。

### (1) アドホック

このステージでは、QM のコーディネーターは、ルーブリックに慣れ親しみ、オンライン学習の質を保証するための基準がどのように構築されているのかを把握する。そして、「QM・ルーブリックの適用」ワークショップに参加するよう教員やスタッフに働きかける。QM のツール、リソース、ワークブックを使ってオンラインコースのさまざまな構成要素を自分自身でレビューできるようにすることが目標として設定されている。

### (2) 品質保証

このステージでは、メンバー自らのコースを評価するための系統立ったプロセスを開発する。このプロセスは、内部の品質保証目標を達成するスケジュールに従って計画される。レビューを実施した各個人は、基準を適用する中で何らかのトレーニングを受ける。ピアレビューから認定を受ける人もいる。通常、このステージでは完全なピアレビューは行われなない。その代わりに、レビューを実施する任務は大学内での単一の組織または委員会が負い、焦点は、品質を評価する QM 基準の一部または全部に照らしてコースを比較することに当てられる。組織は、レビューのスケジュールを作成し、所定期間 (3 年間など) の終了までに、内部委員会または個人による基準を用いたレビューをすべてのオンラインコースで行う。

この時点で、品質保証プロセスは、コースの品質チェックを提供するが、あくまで単一の組織での確認にとどまっており、他の組織での実施に拡張可能なプロセスではないと考えられている。

### (3) 継続的改善

このステージでは、メンバーは継続的、系統的、かつ拡張可能なレビュープロセスを開発する。ただし、組織以外で再現することはまだできない。当該組織向けにカスタマイズされたままだからである。このプロセスを拡張可能な継続的改善プロセスにするものが、ピアレビューや、QM がレビュー者のために用意するフィードバックの使用である。このレビュープロセスは、組織のコース開発、またはコース改善および作成のための年次評価に組み込まれ、レビュー者として参加する教員を含む多くの人々が関与する。さらに、大量のコースがレビューされ、改善を施される。メンバーは、ループリックを修正する場合は MyCR (My Custom Reviews) を使用するが、多くの方は内部レビューの最中に QM の CRM (Course Review Manager) を使用して、コース品質に関するフィードバックを受け、オフィシャルコースレビュー (Official Course Review) に備える。

### (4) ベンチマーク

このステージでは、メンバーは完全なループリックとオフィシャルコースレビューを使って、コースが全国的に、組織全般で再現可能な方法により QM の厳格な基準を満たしていることを確認する。メンバーは、オフィシャルレビューのプロセスを通じて、すべてのコースを配置する公式スケジュールを使ったり、あるいは慎重に選ばれた代表的サンプルを使用したりすることで QM の認定を取得する。認定を取得したコースは、卓越性において基準を満たす高品質なコースであることが他の組織によって認められたコースである。この基準を達成しているということは、組織が品質の保証に取り組み、継続的に改善を行っていることを示す。

### (5) 組織的变化

ここでは、組織全体が、総合的な品質保証のプロセスに全力で取り組み、リーダーシップチームから完全なサポートを受け、このプロセスを長期的な戦略計画に組み込む。例えば、組織内のさまざまな部門が、オンラインコースの改善状況と品質を評価するため、専門の委員会を立ち上げたりする。さらに、QM の役割を担う、または認定されたコースを引き受ける教員やスタッフは、自らの取り組みを認定されたり報奨を受けたりする。この時点までに、組織は、QM のモデルを、例えばプログラムレビューなど教育や学習に関する他の主要エリアに広げるための適切な方針を開発し、品質保証プロセスの維持と発展のためにリソースを注ぐ。

## 2.3. クオリティ・マターズのレビュープロセス

コースにオフィシャルコースレビューを実施し、認定マークを受けることを希望する組織は、コースレビューのプロセスを最大限に活用するため適切に準備する必要がある。例えば、QM のループリックがコース品質の検証にどのように使われているのかを理解したり、レビュープロセスがどのように行われてコース改善のためのフィードバックが提供されるのかを理解したりするなどである。オフィシャルコースレビューが QM とメンバーのいずれによって管理されている場合でも、すべてのコースレビューは、レビュー者の任務を引

き受けるために必ず QM の認定を取得している。レビューチームの構成は、使用されるルーブリックに応じて若干変わる場合がある。例えば、高等教育ルーブリック (Higher Ed Rubric) を使ってレビューを実施するチームは、チーム議長 (Team Chair) としてのマスターレビューアー (Master Reviewer) と、2 人のピアレビューアー (当該分野の専門家 (Subject Matter Expert) 1 名と組織外の担当者 1 名) が配置される。K-12 レビューチームには、2 人の主題専門家と 1 人のマスターレビューアーが配置される。

オフィシャルコースレビューにコースを提出すると、ピアコースレビューチームが QM のルーブリックを使ってコースをレビューし、コースの品質改善方法に関するフィードバックを提供する。レビューアー、講師、コース開発者らとの協力を通じて、メンバーは、85% 以上の品質レベルで基準を満たすようコースの改善に共に取り組む。メンバーは、基準を使ってコースを改善する際に役立つ専門的な開発のオプションも活用できる。基準を満たす方法は数多くあるが、コースは、品質に対する期待を満たして初めて QM 認定を取得できる。

QM による認定の期間はルーブリックに応じて 3~5 年と異なり、その間、学習管理システムやコースカタログに表示され、生徒やその他利害関係者にコースの品質が伝えられる。コースに大幅な変更がなければ、短縮したレビュープロセスにより認定を更新することができる。

#### 2.4. カリフォルニア州立大学の質保証プログラムについて

アメリカのカリフォルニア州立大学 (CSU: The California State University) には、オンライン授業の質保証 (QA: Quality Assurance) プログラムがある。この QA プログラムは 2011 年に設立され、カリフォルニア州立大学の全 23 キャンパスに展開されている。具体的には、CSU の教職員向けに、質の高いオンライン授業を実施するための活動資金やトレーニングを提供している。QA プログラムの修了者にはサーティフィケートが授与される。ウェブサイトには、CSU のそれぞれのキャンパスで QA プログラムを修了した教職員の数が掲載されている。現在までの修了者は 3300 名以上いる。

QA プログラムの目的の一つとして授業評価の開発が含まれている。開発の一環として、前述した QM のルーブリックとは別に QLT (Quality Learning and Teaching) と呼ばれる独自のルーブリックが開発されている。QLT は QM を含む複数のルーブリックやその他の学術研究を参照した包括的なルーブリックである。QLT ルーブリックには 57 項目、QM ルーブリックには 42 項目含まれている。項目ごとに番号が振られており、QLT-QM を対応づけることのできる表 (マトリックス) も提供されている。

#### 2.5. SQuAIR プロジェクトによる質保証の効果検証

ウェブサイトでは、QA プログラム自体の効果を検証した結果が公開されている。QA プログラムの効果検証は、SQuAIR (The CSU Student Quality Assurance Impact Research) プロジェクトの研究として実施されている。効果検証の結果として、例えば、修了した QA プログラムの数に比例して、当該授業を受講した学生から高く評価された項目の割合が統計的に有意に高くなる傾向が報告されていた。また、57 項目ある QLT ルーブリックの中で、特にオンライン授業の質向上に資する項目について言及されていた。具体的には、(1)

ユニバーサルデザイン（受講環境によって学生が不利益を被らないような工夫）、(2) アウトカムの適切な評価、(3) 授業のファシリテーションなどが上げられていた。SQuAIR プロジェクトの作業仮説は「QAプログラムの修了者は質の高いオンライン授業を提供できる」であり、QAプログラムを受講していない教員との比較はもちろん、修了したQAプログラムの数や、CSUにより優れた授業として認定されたことなど、様々なパラメータによりQAプログラムの効果検証が実施されている。

## 2.6. 質保証プログラムのCSUでの展開

CSU East Bay キャンパスには、QM認定を受けた授業の数は2021年10月現在、133コースある。CSUのその他のキャンパスでは、7キャンパスでそれぞれ1～11コースがQM認定を受けている。QM認定を受けた授業があるキャンパスの他は、9キャンパスでCSUのQLTを満たしたコースが少なくとも1つはある。

表1 カリフォルニア州立大学(CSU)の各キャンパスでの質保証(QA)プログラムの展開状況 (2021年10月現在)

	CSU-QLT AND/OR QM	QM-certified
Bakersfield	13	8
Chico	1	0
Dominguez Hills	2	1
Eastbay	147	133
Fresno	8	0
Fullerton	11	4
Humboldt	4	0
Long Beach	5	5
Los Angeles	4	5
Pomona	1	0
Sacramento	7	11
San Bernardino	6	4
San Francisco	1	0
San Jose	5	0
San Jose State	3	0
San Marcos	4	0
Sonoma	3	0
Stanislaus	3	1

CSU のウェブサイトでは QLT のルーブリックが全て公開されている。また、認定された授業を受講した学生による評価についての研究成果が公表されている。これらの公開されている情報は、日本国内の大学における授業設計と評価にも応用できる。しかし、QLT のルーブリックを活用した授業設計と評価に関するオンデマンドの教材は CSU の 23 キャンパスに所属する教職員のみが対象となっており、CSU による QA ルーブリックに関する教材に至っては、CSU QM affiliate の 14 キャンパスに所属する教職員のみが対象となっている。そのため、日本国内の大学からオンデマンドの教材にアクセスをすることはできない。

### 3. 終章

#### 3.1. クオリティ・マターズの日本国内への展開について

日本国内の大学では、大阪大学に QM 認定を受けた授業がある。日本人大学生向けに英語を教えるためのコースで e-learning のシステムを活用してオンライン授業と対面授業を組み合わせた授業について、授業設計から QM 認定を受けるまでの過程と履修者による授業の評価までが学術論文としてまとめられている (Alizadeh 2019)。QM のレビュー担当者による最初の評価では、99 点満点中 70 点と評価され、QM の認定が得られなかった。最初の評価で要件を満たされなかった項目は以下の 6 項目だった。

- 担当教員は、コース環境を使って、すべてのコース要素（シラバス、スケジュール、課題、補助ファイルなど）にアクセスするための明確かつ詳細な指示を学生に与えている。(QLT1.1, QM1.1)
- 学習活動（採点済みの課題、未採点の活動を含む）は、学生が学習を達成する上で適切な活動が設定されている。(QLT2.3, QM2.4)
- 評価の手段（ルーブリックなど）は、詳細、かつ学生の研究や評価すべき各成果にふさわしい手段が選択されている。オンラインでの参加や貢献の方法に対する評価も含まれる。(QLT2.4, QM3.3)
- 担当教員はコースへの参加に関する教員自身の役割を明確に説明している。教員は自ら授業に参加し、学生の主体性を尊重しながら積極的な参加を促している。(QLT4.6, QM5.3)
- 障害者サポートサービス（DSS: disability support services）についての明確な説明を行い、DSS のリソースへの明確なリンクを提供している。(QLT8.3, QM7.2)
- コースのオンライン要素の指示は、論理的で一貫性があり効率的である。(QLT4.3, QM8.2)

これらの項目は、CSU の QA プログラムを修了した教員による授業で“Excellent”の評価を得た授業で特に重要な項目とされた (1) ユニバーサルデザイン（受講環境によって学生が不利益を被らないような工夫）、(2) アウトカムの適切な評価、(3) 授業のファシリテーションとも一致する。

Alizadeh (2019)により開発されたコースの QM レビューでは、日本人学生に対して英語を教える授業の設計と運用について、外国人に対して英語を教える授業についての経験と知識があるレビュー担当者が割り当てられたと言及されていた。大阪大学の事例では、英語を教える授業だったことから、QM 認証を受ける上で適切な担当者によるレビューを受けられたことが推測される。しかし、日本国内の大学で教えられている科目について、直接

QMで認証を受けることは、簡単ではないと考えられる。Alizadeh (2019)は、QMによる正式なレビューの前に、QMのルーブリックに基づいたセルフレビューを実施したと述べられていた。ルーブリックについては、QMのみならず、CSUのQAプログラムでも独自に開発されている。付録にまとめた通り、QLTとQMのルーブリックを対応づけるための情報も公開されている。日本国内の大学でオンライン授業と対面授業を組み合わせる場合は、これらのルーブリックに基づくセルフレビューにより体系的に授業の設計を見直すことができる。しかし、QMプログラムの説明にある通り、ルーブリックは授業の設計に主眼を置いており、授業の運用や配信などの授業の運営に関わることについては、言及されていない。ルーブリックは重要であるが、実際に大学で学生に対して授業を実施する上では、前述した授業のファシリテーションはもちろん、学生の受講環境（通信速度、コンピュータのスペックなど）にも配慮する必要がある、学生が不利益を被らないように適宜サポートをする人材を配置することも必要であると考えられる。

### 3.2. 総括

本論文では、オンライン教育の質保証に関する取り組みが進んでいるアメリカ合衆国の事例を調査した。様々な取り組みの中から、クオリティ・マターズ (QM) とカリフォルニア州立大学 (CSU: California State University) のオンライン教育の質保証システムについて検討をした。

- QMでは、オンライン教育の質を決定する要因として①コース設計、②コースの配信方法、③コースの内容、④教育機関のインフラ、⑤学習支援システム (LMS)、⑥教員のレディネス、⑦学生のレディネスを上げていた。QMのプログラムでは主に①コース設計に焦点を当てているが、QMの加入者は体系的なプログラムに従って学びを深め、教育機関での実践をすることで、①以外の側面への応用も考慮されていることが分かった。
- CSUの質保証プログラムは、プログラムを修了した教員による授業評価の結果やプログラムの効果検証をした研究成果が公表されていた。QLTルーブリックの中では、①ユニバーサルデザイン（受講環境によって学生が不利益を被らないような工夫）、②アウトカムの適切な評価、③授業のファシリテーションが、特にオンライン授業の質向上に資する項目であることが分かった。

これらの調査内容に基づいて、日本国内の高等教育機関におけるオンライン教育に応用できる知見と現状で考えられる課題を上げた。

- 日本国内の大学でオンライン授業と対面授業を組み合わせる場合は、ルーブリックに基づくセルフレビューにより体系的に授業の設計を見直すことができる。しかし、ルーブリックは授業の設計に主眼を置いており、授業の運用や配信などの授業の運営に関わることについては、言及されていない。ルーブリックは重要であるが、実際に大学で学生に対して授業を実施する上では、授業のファシリテーションはもちろん、学生の受講環境（通信速度、コンピュータのスペックなど）にも配慮する必要がある。

コロナ禍後の高等教育において、どのようにオンライン授業を効果的に取り入れるか、反対に対面授業をどのように位置付けるか、授業の設計を個別の授業ごとに考えることが必要である。しかし、具体的にどのように授業の質を向上させられるか、どのような観点から質



を評価すべきなのか、オンライン教育の質に関しては十分な研究がされていない。本論文では主に個別の授業で質を保証する方法について、アメリカ合衆国での事例から示唆を得た。将来的にテクノロジーの発展により、新たな教育の方法・授業の形態が次々と登場することが予想される。今後は個別の授業のみならず、高等教育機関として教育の質をどのように保証できるか、検討が必要であると考えらる。

## 文献

1. “Student Impact Research Community”  
<http://courseredesign.csuprojects.org/wp/qualityassurance/squair/>  
(2021年10月6日アクセス)
2. “An Examination of Quality Assurance Impact on Student Satisfaction in Online teaching.” (2020 AERA Annual Meeting 04/21/2020)  
<https://drive.google.com/file/d/1IDHsHn2t-psXtdx2EW58e0RoTILBRX91/view>  
(2021年10月6日アクセス)
3. “Measuring the Impact of QA Efforts on Teaching-Learning Success” (Cal State 2019 Tech Conference @ San Diego 8/1/19)  
<https://docs.google.com/presentation/d/1NvyqvCmAbDyaPoXhaJkiDyknjAU2zee914sj60t1wWE/edit#slide=id.p2> (2021年10月6日アクセス)
4. “Faculty Perception Survey Data Tables updated 5/3/19”  
[https://docs.google.com/document/d/1xO5gXMfbNKw3dRwTHmqvcYp66Rrc7E5p0\\_oioK8/edit](https://docs.google.com/document/d/1xO5gXMfbNKw3dRwTHmqvcYp66Rrc7E5p0_oioK8/edit) (2021年10月6日アクセス)
5. Picciano, Anthony. *Online Education Policy and Practice*. Routledge, 2016.
6. 田口真奈「授業のハイブリッド化とは何かー概念整理とポストコロナにおける課題の検討ー」『京都大学高等教育研究』第26号、2020年
7. 澁川幸加「単位制度における遠隔授業の制度的変遷と新たな授業形態の登場による今日的な課題」『京都大学高等教育研究』第26号、2020年
8. 坂下嬢子「コロナ禍に対する私立大学連盟の対応と主張」『IDE 現代の高等教育』、2020年10月号 (No. 624)、pp.42-45
9. 小出秀文「コロナ禍に対する日本私立大学協会の対応とこれからの展望」『IDE 現代の高等教育』、2020年10月号 (No. 624)、pp.45-49
10. 高橋祐子「逆境を、創造を灯す光に」『IDE 現代の高等教育』、2020年10月号 (No. 624)、pp.2-3
11. 田中愛治「コロナ禍を越えて進化を目指すー早稲田大学の場合ー」『IDE 現代の高等教育』、2020年10月号 (No. 624)、pp.4-7
12. 「令和2年度における大学等の授業の開始等について (通知) (令和2年3月24日)」 (文部科学省) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/mext\\_00016.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html)  
(2020年10月27日に利用)
13. Alizadeh, M., Mehran, P., Koguchi, I. *et al.* (2019) Evaluating a blended course for Japanese learners of English: why Quality Matters. *Int J Educ Technol High Educ* 16, 6. <https://doi.org/10.1186/s41239-019-0137-2>

### 付録 CSU-QLT ルーブリックのセクションと目的

CSU の QLT ルーブリックを付録としてまとめた。QLT ルーブリックでの番号、内容と並んで、Core 24 に含まれる項目に\*のマークをつけ、QM のルーブリックにも類似した項目が含まれている場合は QM ルーブリックの番号も記載した。

#### (1) コース概要と導入

1.1	講師は、コース環境を使って、すべてのコース要素（シラバス、コースカレンダー、課題、補助ファイルなど）にアクセスするための明確かつ詳細な指示を学生に与えます。	*	1.1 (QME)
1.2	学生には詳細な講師情報が提供されます。それには、学生が連絡を取るときに使用する複数の方法、対応可能時間の情報、略歴、講師の写真などが含まれます。	*	1.8
1.3	コースの説明には、コースの目的とフォーマットの他、事前に必要な知識、資格（該当する場合）も含まれます。	*	1.2, (QME) 1.7
1.4	コースのさまざまな形式のコミュニケーションや対話（チャット、ハングアウト、メール、オンライン対話）における決まり事の期待値を説明し、学生にはっきり伝えます。		1.3
1.5	学問的品位あるいは「倫理規定」を定義します。学生が従うべき、関連する学校方針を明確に伝えるか、それら方針へのリンク（例：オンラインカタログ、学校のウェブページ）を貼ります。	*	1.4
1.6	コース修了に必要な専門能力を一覧化し、オンライン環境がコース全体の中で果たす役割/範囲を特定し、明確化します。		1.6
1.7	講師は、学生の過去の研究例や、関連する質問を尋ねる機会を学生に与えます。		
1.8	講師は学生に、このコースにおける各自の学習目標を説明させます。		

#### (2) 学生の学習の審査と評価

2.1	学生の学習成果は、具体的、明確、かつ測定可能なものにします。	*	2.1, 2.2 (QME)
2.2	評価の方針は、本コースに対する期待と各課題とを明確にしたうえで提示します。	*	3.2, 3.3 (QME)
2.3	学習活動（採点済みの課題、未採点の活動を含む）は、学生の学習成果の達成を促します。	*	2.4, 5.1 (QME)
2.4	評価の手段（ルーブリックなど）は、詳細、かつ学生の研究や評価すべき各成果にふさわしいものとします。これには、オンラインでの参加や貢献の方法に対する評価も含まれます。	*	3.1, 3.3 (QME) 3.4
2.5	学期を通じて、講師は学生の学びに対してフィードバックを提供し、学びの「セルフチェック」を支援するための機会を、複数回提供します。	*	3.5
2.6	学期を通じて、講師は学生の学習状況やコースに関するフィードバックを募る機会を複数回設けてコースの改善に努めます。		

## (3) 活用する教材や資料

3.1	講師は、学生がコース教材を入手できるよう十分な通知および時間を提供します。	*	
3.2	シラバスには、教科書や教材が必要なのか、または推奨されているのかを記載します。		4.2 (QME)
3.3	講師は、すべての教材の目的について、それらがコースやモジュールの学習目的にどう関係するのかを説明します。		4.1, 4.2 (QME)
3.4	可能であれば、講師は、オープンエデュケーションリソース (Open Educational Resource) を含め、学生が教材を入手する方法に関して選択肢を奨励または提供します。		
3.5	教材には色々なタイプや観点がありますが、テキストなど1つのタイプのコンテンツに過度に頼らないようにします。	*	4.5
3.6	学問の高潔性を模範とし、講師はコース内で使用したすべてのリソースや教材を適切に引用します。		4.3

## (4) 学生との対話およびコミュニティ

4.1	コースの開始時に、講師は学生に自己紹介の場を与え、共同体意識を養います。	*	1.9
4.2	講師は、優秀な学習者/学生になるための情報を提供します。		
4.3	コースのオンライン要素の指示は、論理的で、一貫性があり、効率的です。	*	8.1, 8.2
4.4	学習活動は、頻繁かつ継続的な仲間同士の交わりを奨励するアクティブラーニングを促し、サポートします。	*	5.2 (QME)
4.5	学生との対話の方法および成果は、はっきりと伝達します。		5.4
4.6	講師は、コースへの参加に関する講師自身の役割を明確に説明します。講師は自ら参加し、学生の参加を促して管理しますが、学生に適度に責任を負わせます。		5.3 (QME)
4.7	コースの学習活動は、学生が基本的な概念を理解し、コース外で役立つスキルを身につけるのに役立ちます。	*	

## (5) ファシリテーションと指導

5.1	この講師は、コースのテーマに関して同意できる部分とできない部分とを見極めるのに役立ちました。		
5.2	講師は、コースのテーマや内容の重要性を学生に理解させ、コースのアクティビティや関連する実践的体験をサポートします。		
5.3	この講師は、効果的かつ魅力的な方法でコースの内容や概念を提示しています。		
5.4	講師は、コースの体験を通じて学生が新しい概念を学べるよう促します。		
5.5	この講師は、関連する問題に的を絞って議論が行えるようにしました。		
5.6	講師は、良いタイミングでフィードバックを提供しています。	*	3.5
5.7	講師は、機会があるときに重要な目標やコースのテーマを伝えてくれます。		
5.8	講師は、学生が課題を継続できるよう、各モジュールの締め切りや期間、その他指示に関するリマインダーを提供します。	*	

## (6) 教育と学習の技術

6.1	ツールとメディアで、コースの学習目的/成果をサポートします		6.1 (QME)
6.2	講師は、学習管理システム (Learning Management System) または同様のシステムが提供する最新のツールを活用して学習を強化しています。	*	6.3
6.3	コースで使用する技術ツールやリソースが、学生の参加や積極的学びを可能にします。		6.2 (QME)
6.4	講師は、コースに必要な技術や関連するリソースへのアクセスに関して明確な情報を提供しています。	*	1.5
6.5	課題を完成させ提出するための、許容できる技術フォーマットが明確に説明されています。		

## (7) 学習者のサポートとリソース

7.1	講師は、サポートプロセスにおける講師自身の役割を説明しています。		
7.2	コースのシラバス (またはそれに類するもの) には、大学が提供する技術サポートについての明確な説明と、学生がいつ、どのようにそれらにアクセスすべきかについてのアドバイスが記載されているか、またはそれらへのリンクが貼られています。	*	7.1 (QME)
7.3	コースのシラバス (またはそれに類するもの) には、学生が学習目標を達成する際に利用できる大学の学問的 (非技術的) サポートサービスおよびリソースが紹介されています。障害者サポートサービス、ライティングセンター、チュータリングセンターなど。	*	7.3 (QME)
7.4	コースのシラバス (またはそれに類するもの) には、教育機関の学生支援 (非学問的、非技術的) サービスやリソース (アドバイス、メンタリングなど) が学生の成功にどのように役立ち、学生がこれらのサービスをどう利用できるのかに関する情報が記載されています。		7.4

## (8) アクセシビリティとユニバーサルデザイン

8.1	シラバス (またはそれに類するもの) には、教育機関で要求または推奨されているかを問わず、キャンパスのアクセシブルポリシーへのリンクが貼られています。	*	7.2 (QME)
8.2	講師は、障害者を受動的に受け入れるのではなく、すべての学生に対する幅広い学習スタイルと能力をサポートします。		3.4
8.3	障害者サポートサービス (DSS, disability support services) についての明確な説明を行い、DSS のリソースへの明確なリンクを提供します。	*	7.2 (QME)
8.4	学生は、大学の障害者支援オフィスに正式に登録している人に支援を提供する講師の役割を、はっきり確認できます。		
8.5	講師が作成したか、外部から入手されたコースのドキュメントや教材は、障害のある学生がアクセスできる形式となっています。	*	8.3 (QME)

8.6	講師およびコースは、正式にサポートされているキャンパス技術を採用しており、これらは完全なアクセシビリティと支援技術に対応しています。使用されているサードパーティ製のツールはアクセシビリティに対応し、可能な限り支援技術に対応しています。		
-----	---	--	--

(9) コースの概要とまとめ

9.1	講師は、締めくくりとして学生に質問をする機会を与え、達成への理解を深めています。		
9.2	講師は、総合的な学習や進歩、学期中の体験に関するフィードバックを学生に提供します。		3.5
9.3	講師は、学生が自分の学習を振り返り、個人の学習目標と講師の期待（定義した学習目標および成果）とを結びつける機会を提供します。		

(10) モバイルプラットフォームへの対応（オプション）

10.1	コースの内容は、パソコン、タブレット、スマートフォンなどさまざまなプラットフォームから簡単に読むことができます。		8.1 (QME)
10.2	音声と映像のコンテンツは、パソコン、タブレット、スマートフォンなどさまざまなプラットフォームから簡単に読むことができます。		8.4, 8.5
10.3	ユーザーが基本のコンテンツにたどり着くまでに要するステップは、最小限に抑えられています。		8.1 (QME)
10.4	学生の学習成果に直接応用されないコンテンツの視認性は、最小限に抑えられています		

佐野 ひとみ（さの ひとみ） 東京通信大学 情報マネジメント学部 特任研究員

